

小規模大学におけるキャンパス内の 「癒し空間」としての居場所の意義について^{1) 2)}

Psychological Significance of Personal Places in Campus
of a Small Scale University as "Relieving Spaces"

水野邦夫
Midzuno Kunio

要 約

本研究では、小規模大学の学生が学内のどのような場所に癒しを感じ、また各空間の癒され度が対人関係のストレスとどのように関係するかについて検討を行った。その結果、女子は男子よりも公的な空間での癒され度が高く、かつ出入りの多い空間よりも癒され度が高いことが見出され、女子はソーシャルサポート源として教職員なども活用しているのではないかと考察された。また、女子は対人ストレスが高い者ほど人気のない空間で癒しを感じることを示されたが、女子の友人関係やストレス対処方略の特徴から、対人的なストレスが生じた場合、対人場面から逃れることのできる場所で癒しを求めやすいのではないかと考察された。

Key Words : 学校適応, 癒し, 居場所, 対人ストレス

はじめに

平成19（2007）年8月に発表された平成19年度学校基本調査によると、平成19年3月に高等学校を卒業した生徒の大学等（大学学部、短期大学本科、大学・短期大学の通信教育部、大学・短期大学の別科、高等学校専攻科、特別支援学校高等部専攻科）への進学率は51.2%で、過去最高を記録した（文部科学省生涯学習政策局調査企画課、2007）。また、高等学校を卒業する学生が選り好みさえしなければどこかの大学に入学できる、いわゆる「大学全

- 1) 本研究は、聖泉大学人間学部人間心理学科平成18年度開講科目「心理学応用演習」において、筆者の指導のもと、畑維久美さん、林由美香さん、松本洋美さん、辻林孝くん、津田由紀子さんが行った調査について、著者が別の角度から分析したものである。5名のみなさんには厚く謝意を申し上げます。
- 2) 本研究の一部は関西心理学会第119回大会（平成19年11月18日、於 関西大学）において口頭発表された。

入時代」はすぐそこまで来ていると言われている。このように、大学進学への関心は高く、また入学が容易になるなか、大学にはさまざまな学生が入学するようになったが、その一方で、大学不適應の問題がクローズアップされている。藤井（1998）はいくつかの文献をもとに、少なくとも全体の2割以上の学生が大学不適應を起こしているのではないかと予測している。内田（2006）は茨城大学保健管理センターが全国の国立大学生を対象に行った調査結果について報告しているが、特に休学率の上昇が目立つこと、消極的理由（スチューデントアパシーなど）による退学率が在籍学生数比で0.8%前後を示していること、退学者のうち、消極的理由による者が約50%を占めることなどを指摘している。

大学側もこのような状況に対し、決して手をこまぬいているわけではないが、谷島（2005）は、大学側の対応はFD（Faculty Development）やレメディアル教育などの学習面ばかりが重視されており、むしろ大学での人間関係や社会生活において適應の困難な学生に対する対応が必要であると主張している。同じく谷島（2005）は、学生が学校を辞めたいと思った理由（自由記述）について、1）目的意識のズレ、2）人間関係、3）学校・授業への不満、4）学力とのズレという4つのパターンに分類しているが、このうち人間関係については、関係づくりを促進する上で学生の居場所づくりが課題であり、大学に居場所がなければ親密な人間関係を築くことは難しいであろうと述べている。

キャンパスにおける居場所の重要性については、すでに都筑（1998）が、物理的な空間としての居場所を準備することは重要な教育的課題であると指摘しているが、大田・桜井（2003）は、学生にとって居場所の乏しいキャンパスは孤立感を深め、学生の心理的な問題を誘発しやすいことを指摘している。大学生の学校適應について、居場所という観点から検討することは非常に意義があり、なおかつ、敷地面積の小さい大学にとって、居場所の機能を調べることは重要であると思われる。

そこで本研究では、小規模大学の事例として、本学（聖泉大学）の学生を

対象に調査を行い、キャンパス内の各空間が彼らの精神的健康とどのように関連するかを検討することを目的とした。なお、今回の調査ではキャンパス内の各空間でどれくらい癒しを感じるか、および各空間での癒され度と対人ストレスとの関係を中心に検討を行った。

方 法

被調査者 聖泉大学人間学部の学生に下記質問紙への回答を依頼したところ、132名（男子83名、女子49名）がこれに応じた。

質問紙 下記の質問群からなる「聖泉癒しスポットに関する調査」と題した質問紙を作成した。

- 1) デモグラフィック項目 デモグラフィック情報に関するものとして、性別、学年、喫煙の有無を尋ねる質問項目を設けた。
- 2) 癒し空間に関する項目 聖泉大学人間学部3回生5名が協議し、学内の主な空間として12の場所を選び出した（場所については表1を参照）。次に、上記の12の場所および「その他」と称して、他に思いつく空間があれば1つだけ挙げられるようにした計13の空間それぞれについて、「あなたが癒されたいときに、以下の場所ならどれくらい癒されますか？」と、4段階評定で回答できるようにした。
- 3) 対人ストレスに関する項目 橋本（1997）の対人ストレスイベント尺度項目を4段階評定で回答できるようにした。

手続きならびに実施時期 上記質問紙を、被調査者の許可を得た上で、授業時間の一部や休み時間を利用して回答を求めた。実施時期は平成18（2006）年後期（10月～11月ごろ）であった。

結 果

喫煙習慣について 喫煙の有無について度数を調べたところ、男子については、1回生は吸う：吸わない＝3：17、2回生は0：24、3回生は8：10、4回生は5：16であった。女子については、1回生は1：16、2回生は1：

8, 3回生は2 : 13, 4回生は1 : 11であった。このように、今回の被調査者は8割以上が喫煙習慣がなかった。ただし、3回生男子については、他よりも喫煙者率が若干高かった。

各空間での癒され度について「その他」を除く12の空間について、癒され度の平均値を算出した。その結果を図1に示す。図より、図書館やラウンジは癒され度が大きい、第一事務室や喫煙所は癒され度が低いのがわかる。

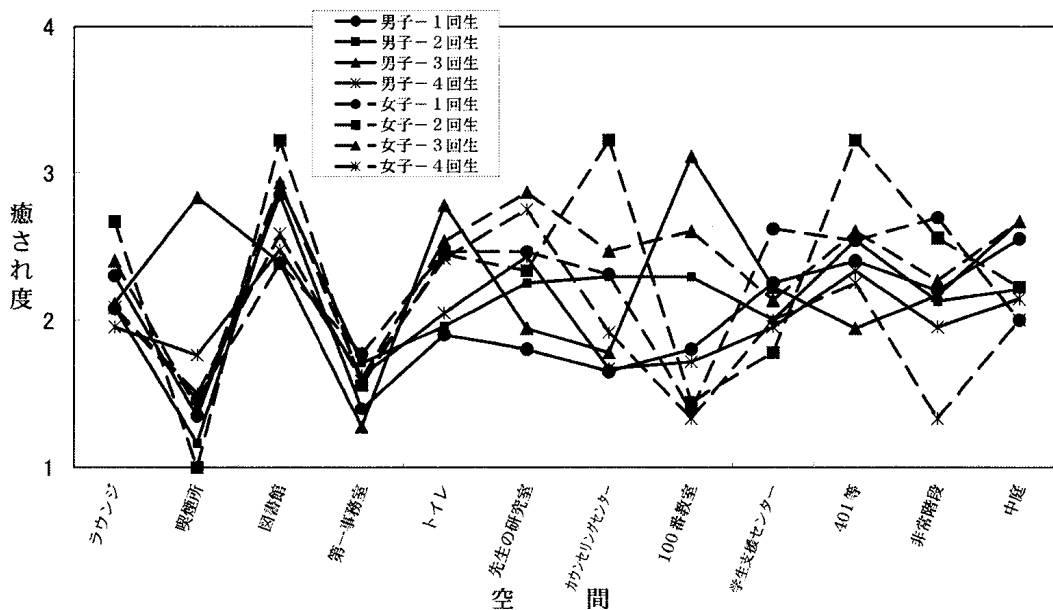


図1 各空間における癒され度の平均評定値

一方、性別や学年によりばらつきは大きく、たとえば、3年生男子は他よりも、喫煙所や100番教室での癒され度が高く、2回生女子はカウンセリングセンターや401位の広さの空き教室での癒され度が高く、また、4回生女子は非常階段での癒され度が低い。このような違いは、単に性別や学年（年齢的発達）の要因だけでなく、学年組織特有（学年のカラーなど）の要因が現れていると考えられる。

各空間の捉えられ方について 次に、各空間がどのように捉えられているかを調べるために、各空間どうしの癒され度についてピアソンの相関係数を算出し、1から各係数値を減じた値を空間どうしの非類似度として、多次元尺度構成法（MDS。2次元解）により検討した。その結果を図2に示す。なお、

適合度 (Badness-of-Fit Criterion) は .142であった。

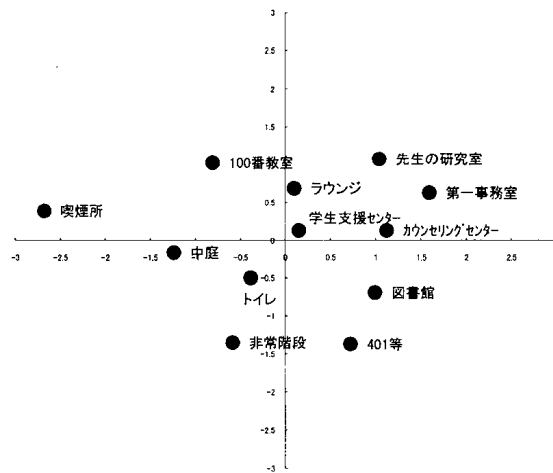


図2 各空間の布置 (全体)

第 I 軸 (横軸) は公的—私的空間と解釈できよう。第 II 軸 (縦軸) の解釈はやや困難であるが、疎的—密的空間と解釈できよう。なお、男女別にも同様の分析を行った (Badness-of-Fit Criterion は、男子 .123, 女子 .140であった)。その結果を図 3, 図 4 に示す。男子は、やはり第 I 軸は公的—私的空間, 第 II 軸は疎的—密的空間と解釈できよう。しかし、女子については第 II 軸の解釈はさらに困難である。また、女子の場合、先生の研究室がかなり中心に寄っているのが特徴的といえよう。

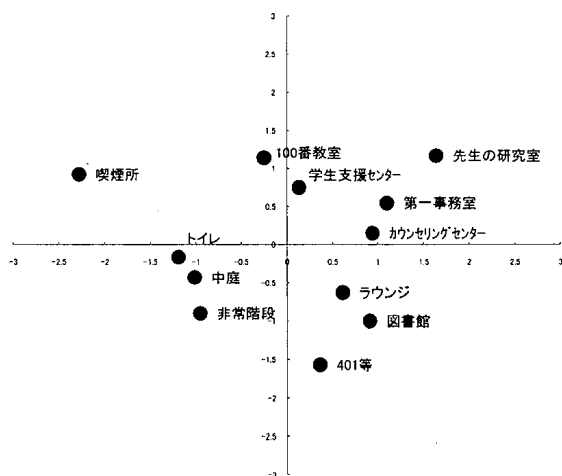


図3 各空間の布置 (男子)

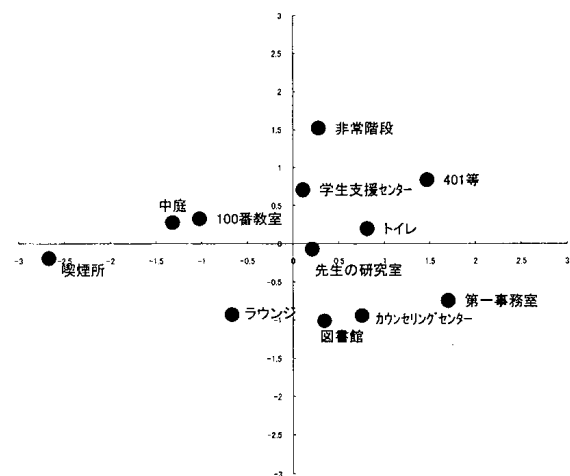


図4 各空間の布置 (女子)

註：全体の結果や男子の結果と比較しやすいように、実際の結果を180°反転させた。

表1 癒し空間の因子パターンおよび因子間相関

空 間	I	II	III	IV	h^2
先生の研究室	.808	-.068	-.008	-.010	.617
第一事務室	.765	-.075	.081	-.098	.577
カウンセリングセンター	.496	.442	-.054	-.051	.580
学生支援センター	.486	.151	.189	.234	.449
ラウンジ	-.031	.839	-.176	.265	.718
図書館	-.019	.797	.023	-.153	.647
非常階段	-.010	-.098	.882	-.043	.734
トイレ	.282	-.134	.667	.159	.548
中庭	-.163	.254	.509	.473	.640
喫煙所	-.226	-.180	.127	.746	.665
100番教室	.289	.185	-.038	.683	.625
401等	-.041	.457	.426	-.462	.655
寄 与	2.031	1.980	1.785	1.659	7.455
説明率	16.93%	16.50%	14.88%	13.83%	62.13%
因子間相関					
	I	II	III		
	II	.353			
	III	.124	.286		
	IV	.000	.046	.065	

註1:ゴシック太字は因子負荷量の絶対値が.40以上であることを表す。

註2:「401等」は、実際の質問では「401位の広さの空き教室」と尋ねている。

註3:第一事務室は教務関連を中心とした事務室、学生支援センターは学生の厚生や進路関連の事務室、100番教室は学生に開放された比較的自由に使用できる(自習、遊び、コンパなどができる)部屋、401等は30~50名程度が受講できる広さの教室である。

癒し空間の因子分析 質問紙2)の癒し空間に関する項目のうち、「その他」を除いた12の空間について因子分析(主成分法, Promax 回転)を行った。なお, 因子数は解釈可能性を考慮して4因子とした。因子パターンおよび因子間相関を表1に示す。第1因子は先生の研究室, 第一事務室, カウンセリングセンター, 学生支援センターが高く負荷しており, 「公的な空間」と解釈した。第2因子は, ラウンジ, 図書館のほか, カウンセリングセンター, 401位の広さの空き教室も比較的高く負荷しており, 「静かな空間」と解釈した。第3因子は, 非常階段, トイレ, 中庭や, 401位の広さの空き教室も高く負荷しており, 「人気(ひとけ)のない空間」と解釈した。第4因子は喫煙所や100番教室, 中庭が高く, 401位の広さの空き教室がマイナスに負荷量が高く「出入りの多い空間」と解釈した。

性別による癒され度の違い 上記4つの空間について、男女で癒され度にごのような違いが見られるかを調べるために、各因子の因子得点を従属変数とした2（性別）×4（空間）の分散分析を行った。その結果、性別×空間の交互作用が有意であった（ $F(3, 390) = 5.07, P < .005$ ）ので、下位検定を行ったところ、公的な空間では女子の方が、出入りの多い空間では逆に男子の方が癒され度が有意に高かった。また女子は出入りの多い空間よりも公的な空間の方が癒され度が有意に高かった（図5参照）。

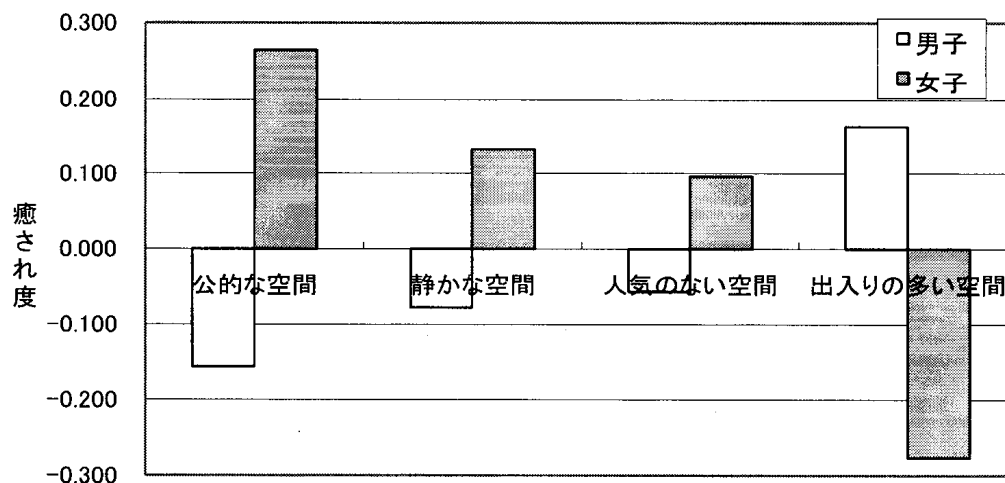


図5 各空間における癒され度の性差

癒され度と対人ストレスの関係について 対人ストレスイベント尺度について、因子分析（主成分法，Promax 回転）を行った。なお，橋本（1997）の結果に基づき，因子数は3因子に指定した。因子パターンおよび因子間相関を表2に示す。表より，橋本（1997）とほぼ同様の因子パターン（対人劣等，対人葛藤，対人摩耗）をしているのがわかる。そこで，これらの対人ストレスと各空間での癒され度との関連性を調べるために，両者の因子得点の相関係数を算出した。なお，算出にあたっては，全体および男女別に求めた。その結果を表3に示す。

全体的には，人気のない空間の癒され度と劣等，葛藤，摩耗の各対人ストレスの間に有意な相関がみられ，対人ストレスが強いほど人気のない空間で

表2 対人ストレスイベント尺度の因子パターンおよび因子間相関

項目番号	橋本(1997)による分類		I	II	III	f^2
20	劣等	知人に対して劣等感を抱いた	.777	-.022	-.137	.533
17	劣等	知人とどのようにつきあえばいいのか分からなくなった	.768	.091	-.121	.596
19	劣等	会話中、何をしゃべったらいいのか分からなくなった	.754	-.037	-.052	.520
13	劣等	知人が自分のことをどう思っているのか気になった	.753	-.111	.069	.541
14	劣等	相手が嫌な思いをしていないか気になった	.737	-.066	.136	.589
15	劣等	周りの人から疎外されていると感ずるようなことがあった	.679	-.056	.130	.506
18	劣等	親しくなりたい相手となかなか親しくなれなかった	.664	-.008	-.053	.414
16	劣等	会話中に気まずい沈黙があった	.560	.126	.240	.575
21	劣等	自分の言いたいことが、相手に上手く伝わらなかった	.496	.131	.219	.474
22		知人に嫌な思いをさせた	.493	.158	.165	.448
12		誰が悪いというわけでもないとき、自分から謝った	.429	.318	-.034	.388
30		知人に深入りされないように気を使った	.295	.012	.285	.236
3	葛藤	知人から責められた	-.181	.811	-.056	.530
7	葛藤	知人に嫌な顔をされた	.210	.694	-.090	.595
6	葛藤	知人に誤解された	.253	.688	-.121	.613
4	葛藤	知人に軽蔑された	.128	.640	-.096	.446
5	葛藤	知人が無責任な行動をした	-.092	.612	.171	.443
2	葛藤	知人とけんかした	-.030	.598	.064	.379
9	葛藤	知人と意見が食い違った	-.099	.548	.104	.427
10		知人のストレス発散に付き合わされた	-.227	.504	.276	.355
8	葛藤	同じことを何度も言われた	.051	.459	.124	.304
1	葛藤	知人に無理な要求をされた	.046	.428	.106	.257
11		約束を破られた	.062	.365	.177	.253
26	摩耗	あまり親しくない人と会話をした	-.078	-.114	.820	.571
25	摩耗	嫌いな人と会話をした	-.130	-.176	.701	.560
23		上下関係に気を使った	.203	-.034	.611	.483
28	摩耗	無理に相手に合わせた会話をした	.287	-.002	.557	.509
27	摩耗	自慢話や愚痴など、聞きたくないことを聞かされた	.055	.155	.556	.442
24	摩耗	テンポの合わない人と会話をした	-.022	.208	.513	.387
29	摩耗	好意的な知人の誘いを断った	.230	.010	.304	.202
寄与			5.631	4.525	3.419	13.574
説明率			18.77%	15.08%	11.40%	45.25%
因子間相関						
			I	II		
			II	.446		
			III	.368	.438	

註1:ゴシック太字は因子負荷量の絶対値が.40以上であることを表す。
 註2:劣等=対人劣等、葛藤=対人葛藤、摩耗=対人摩耗
 註3:尺度項目および橋本(1997)による分類は遠藤(2001)を参照した。

表3 各空間での癒され度と対人ストレスの相関

	対人劣等	対人葛藤	対人摩耗
公的な空間(N=130)	.090	.094	.062
男子(N=81)	.044	.030	.033
女子(N=49)	.147	.226	.152
静かな空間(N=130)	.074	.049	-.007
男子(N=81)	.084	-.064	-.069
女子(N=49)	.045	.270	.139
人気のない空間(N=130)	.244 **	.180 *	.240 **
男子(N=81)	.195	.120	.198
女子(N=49)	.332 *	.305 *	.346 *
騒がしい空間(N=130)	-.098	.003	.056
男子(N=81)	.113	.096	.186
女子(N=49)	-.460 ***	-.184	-.230

註: * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

癒されると感じるが、他の空間では対人ストレスと癒され度の間にはほとんど関係がないのがわかる。また、男女別に見ると、女子は対人ストレスと人気のない空間の癒され度および対人劣等と騒がしい空間の癒され度の間に関連がみられ、対人ストレスが強いほど人気のない空間で癒されると感じており、また対人劣等が強いほど出入りの多い空間では癒されないと感じていることが示された。一方男子については、対人ストレスと空間の癒され度の間に関連はみられなかった。

考 察

図書館やラウンジは概して癒され度が高く、被調査者の多くは静かな環境に癒しを求めているといえよう。逆に喫煙所や第一事務室での癒され度が低かったが、喫煙所については、おそらく騒がしいイメージが強いことや、タバコを吸わない者にとって癒しの場とはなりにくいことなどが原因であると考えられる。一方、第一事務室は課題などを提出する事務的な場であり、くつろいだり長居をしたりする場ではないため、癒され度が低かったのであろう。しかし、空間の癒され度は、先にも述べたように、学年のカラーなどの要因が大きく影響しているようである。すなわち、ある特定の学年・性別がグループを形成して特定の居場所（いわゆる「たまり場」）を占め、そこを癒し空間としていることが考えられる。喫煙所や100番教室は3回生男子の癒され度が高く、カウンセリングセンターや401位の広さの教室は2回生女子の癒され度が高くなっているのはそのためかもしれない。今回は性別と学年のみを対象に分析しているが、学年の中にもいくつかのグループが存在し、それぞれが特定の居場所を求めることも十分に考えられる。もしそのような居場所が学生の精神的健康に寄与するのであれば、大学側としてはなるべく多くの空間を提供できる態勢を整えておくことが重要であるといえよう。尤も、本学のように敷地面積の小さい学校の場合、これを実現することは必ずしも容易ではないが、谷島（2005）の指摘するとおり、物理的に学生の居場所の乏しいキャンパスでは、学生の適応に関して大学側の十分な配慮が必要

であると考えられる。敢えて物理的空間の確保にこだわるとすれば、キャンパス内の無駄な空間を整理・区画したり、パーティション的なものなどを活用したりして空間を増やすなどの方法も考えられよう。

MDS および因子分析の結果から考えると、学内の空間は公—私、疎—密という次元で捉えられているようである。因子パターンをみると、中庭、401位の広さの教室は複数の因子で高く負荷しているが、これらの空間が時間帯によってさまざまな特徴を有することを示していると考えられよう。また、カウンセリングセンターも複数の因子で高く負荷しているが、単なる公的空間として捉えられていない点は注目すべきであろう。このように複数の側面を持つ空間はより多くの学生の「受け皿」としての役割を担うかもしれない。時間帯による活用方法を考えたり、より多くの教職員を充てたりするなどの対応も必要となるであろう。

次に性別による癒され度の違いであるが、女子は男子よりも、公的な空間で癒され度が高いが、出入りの多い空間では癒され度が低く、出入りの多い空間よりも公的な空間で癒され度が高いという結果が得られた。女子が公的な空間で癒され度が高い点については、女子におけるソーシャルサポートの受け方が影響していると考えられる。ソーシャルサポートに関する多くの研究において、女子の方が男子よりも多くのサポートを受け取っていることが報告されているが（福岡・橋本，1995；久田・箕口・千田，1989；森下，1999；尾見，1999；嶋，1991，1992；和田，1992），女子は男子と異なり、友人のほかに教職員なども話し相手や相談相手として捉えていることが考えられよう。坂・真中（2002）は、高校生を対象とした研究ではあるが、学校の先生からのサポート認知は他のサポート源（友人，家族）よりも低いことを示しているが、教職員と学生の心理的距離が近い学校組織であれば、女子は教員らをもサポート源として活用すると考えられる。女子学生の対人ストレスを緩和する存在としての教職員の役割は、今後ますます期待されるところであろう。

一方、出入りの多い空間において女子の癒され度が低かった点については、

今回挙げられた人出の多い空間が喫煙所のように男子がよく利用する空間であり（今回の被調査者の場合、喫煙者数は男子16名に対し、女子は5名であった）、女子はそこに癒しを感じにくかったことが考えられる。この点は、先の指摘とも関連するが、いかに空間を増やし、個人やグループのニーズにあった空間を確保するかの問題であるといえよう。

また、各空間での癒され度と対人ストレスとの関連について、女子は対人ストレスを感じやすい者ほど人気のない空間で癒しを感じやすく、また対人劣等のストレスを感じやすい者ほど騒がしい空間では癒しを感じにくいことが見出された。これについては、女子の対人関係方略や対人ストレス処理方略が影響していると考えられる。水野（2000, 2002）はいくつかの先行研究をもとに、女子の友人関係が閉鎖的であることや、強い感情的つながりが背景にあると論じている。このような関係では、仲がこじれるなどの事態が生じた場合、窮屈さから解放されようと、一人でいたいと感じやすくなるかもしれない。また島津・小杉（2000）は、女子は男子よりも消極的・問題回避型のストレスコーピング方略をとりやすいことを報告しているが、女子は対人ストレスを感じた場合には、ストレスを積極的に除去しようとするより、ストレス事態から距離を置こうとするため、人気のない空間に癒しを求めるのではないかと考えられる。よって、とりわけ女子の精神的健康への配慮を考えた場合、キャンパス内に「一人でいられる空間」を確保することが重要であると思われるが、やはりここでも居場所確保の問題が重要となる。

なお、対人劣等ストレスを感じやすい者ほど出入りの多い空間では癒しを感じにくいという結果は、本研究のデータだけでは解釈しづらいところはあるが、他者に引け目を感じると出入りの多い空間を避けたいということからは十分に考えられることであろう。

最後に、調査の実施にあたり、改善すべき点がいくつか挙げられる。まずは癒し空間についてであるが、今回挙げた以外にも、食堂やクラブハウス、体育館、コンピュータ室など、学生が利用できるさまざまな空間があるが、

それらは基本的に調査の対象外となってしまった。事前調査をするなどして、さまざまな空間があることを認識しておく必要があった。また各空間の癒され度についても、単に「どれくらい癒されますか」と漠然とした尋ね方であり、厳密さや詳細さに欠けていると思われる。今後は質問内容についても再検討する必要があるだろう。その他、女子のデータが少なかったり、3回生男子のみ喫煙者が多かったりなど、データの偏りがあったことも否めない。今後はより包括的な調査を行っていくことで、新たな発見が期待されよう。

引用文献

- 遠藤公久 (2001). ストレス 対人ストレスイベント尺度 堀 洋道 (監修) 松井 豊 (編) 心理測定尺度集Ⅲ サイエンス社 Pp.4-8.
- 藤井義久 (1998). 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **68**, 441-448.
- 福岡欣治・橋本 宰 (1995). 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康との関連 教育心理学研究, **43**, 185-193.
- 橋本 剛 (1997). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, **13**, 64-75.
- 久田 満・箕口雅博・千田茂博 (1989). 大学生におけるソーシャル・サポートに関する研究 (1) 日本心理学会第53回大会発表論文集, 314.
- 水野邦夫 (2000). 恋愛関係および友人関係の捉え方における性差について 聖泉論叢, **8**, 59-71.
- 水野邦夫 (2002). 恋愛・友人関係観の性差に関する研究 聖泉論叢, **10**, 81-92.
- 文部科学省生涯学習政策局調査企画課 (2007). 平成19年度学校基本調査速報について
(http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/07073002/001.htm 最終情報取得日：2007年11月9日)

- 森下正康 (1999). 「学校ストレス」と「いじめ」の影響に対するソーシャル・サポートの効果 和歌山大学教育学部紀要教育科学, **49**, 27-51.
- 尾見康博 (1999). 子どもたちのソーシャルサポート・ネットワークに関する横断的研究 教育心理学研究, **47**, 40-48.
- 太田裕一・桜井育子 (2003). コミュニティと危機介入—二つのキャンパスの学生相談における比較— 学生相談研究, **24**, 119-128.
- 坂 晴己子・真中陽子 (2002). 高校生の学校ストレスとソーシャルサポートおよびコーピングとの関連 明治学院大学文学研究科心理学専攻紀要, **7**, 9-18.
- 島津明人・小杉正太郎 (2000). 職場におけるコーピング研究 産業精神保健, **8**, 239-242.
- 嶋 信宏 (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究, **39**, 440-447.
- 嶋 信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, **7**, 45-53.
- 都筑 学 (1998). キャンパスにおける大学生の居場所—郊外型のマンモス私大における分析— 日本青年心理学会大会発表論文集, **6**, 36-37.
- 内田千代 (2006). 国立大学の休・退学, 留年学生および死亡に関する調査—精神科医から見たサポートの必要性— 国立大学マネジメント, **2**, 27-32.
- 和田 実 (1992). 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響 教育心理学研究, **40**, 386-393.
- 谷島弘仁 (2005). 大学生における大学への適応に関する検討 人間科学研究 (文教大学人間科学部), **27**, 19-27.